

土器生産の変容と地域社会の圏域 —総括にかえて—

川西宏幸

Changes in Pottery Manufacturing and the Sphere of a Local Society:
A Summary of the 1998 Symposium

Hiroyuki KAWANISHI

シンポジウムの発表及び討論のなかから、ひとつは土器生産の変容、もうひとつは圏域という二つのテーマをとりあげて、中国・日本との比較を試み、問題の在り処を探る。土器生産の変容についていようと、原王朝期に大量生産化が達成され、ついで王朝期に製法などによる差別化=階層化が著しくなる、という段階を踏む。この点で、西アジアは中国と軌を同じくする。ただし、差別化の達成の仕方に違いがみとめられる。日本の場合、変化の方向は西アジアや中国とかなり近いけれども、相違点もまた少なくない。考古学上で抽出した圏域として、40km 圏と200km 圏があり、これらは、西アジアにとどまらず、中国や日本でもその存在を垣間見ることができる。したがって、風土や農耕形態の相違にかかわらず、さらには文明度の高低をも越えて、普遍的に存在する可が高い。それならば、都市の形に表現されているような、西アジアと中国との初期文明の質の差が、どうして生能性まれたのか。なぜ日本の場合には、国家の出現とともにあって都市が定立しなかったのか。圏域論から派出するこれらの問題について言及する。

キーワード：土器生産、土器の大量生産と階層化、40km 圏、200km 圏、定型都市と非定型都市

Two themes, changes in pottery manufacturing and social spheres, are adapted in this paper from the various topics presented in our 1998 Symposium. Some comparison of West Asia with China and Japan is attempted and a consideration of where further problems lie is discussed under these themes. As to the changes in pottery manufacturing, a mass production system was achieved in the Proto-Dynastic Period and afterward the stratification and discrimination by means of materials and techniques became prominent in the Dynastic Period. Both West Asia and China are similar in following such a process, though the way the stratification was attained is different. In the case of Japan, the course of the transition is rather close to that of West Asia and China, although some important differences relating to state formation are also recognised. The presence of 40 km and 200 km spheres is recognised through archaeological evidence not merely in West Asia and China but even in Japan. In consequence, it is quite possible that they were in existence as social spheres for human activities notwithstanding the differences of local natural features and agriculture, and the disparity of the degree of civilization. If this may be acknowledged, from what did the differences of early civilizations between West Asia and China as shown in the city form, i. e. organized and planned, result? Why were cities not born along with state formation in the Kofun Period in Japan? These questions extending from social sphere theory are referred to.

Key-words : Pottery manufacturing, mass production and stratification of pottery, 40km sphere, 200km sphere, planned city and unplanned (organic) city

はじめに

平成10年6月に筑波大学で行われました日本西アジア考

古学会総会シンポジウム「古代西アジア土器職人の世界—都市出現期の土器—」では、遠路をいとわず、会員の方

がたをはじめとする諸氏のご参考をたまわり、おかげをもちまして稔り多い成果をあげることができました。開催校の関係者の末席に連なったひとりとして、あらためてお礼を申し上げる次第です。そのおりにパネラーの方がたから発表されたご高説の多くは、論文の形に体裁を整えて、本紙に掲載されております。ぜひご一読下さい。また、提示されたご高説をめぐって、専門的な議論が多岐にわたって交され、時間の制限を忘れるほどの過熱ぶりであったことを、なつかしく思いかえしております。

しかし悲しいかな、発表されたご高説の数かずや、交された議論に、脈絡をつけてご紹介することは、浅学非才、無知蒙昧の私には、とうていできかねます。ましてや、自らの不勉強を比較考古学という看板で糊塗している者が、総括の重任にあたるなどということは、発表なさったその道の方がたに対して、礼を失すことになりかねません。そこで、素人の立場という限定詞つきですが、拝聴させていただいたおりに、私なりに興味を覚えた部分を書きつらぬ、可能ならば若干の所感を添えて、応分の責を果たしたいと存じます。なお、発表内容のご紹介に誤りがありましたら、理解力不足の私の責任です。ご海容のほどお願い申し上げます。

生産の変容

北メソポタミアの都市搖籃期であるウバイト・ウルク両併行期の土器生産をとりあげ、その変容ぶりを辿った小泉さんの発表によりますと、成形、調整、施文の面で製作工程は簡略化=効率化の度を加え、ウルク前期併行期に入るとこの傾向がいっそうきわだち、ウルク中期併行期に大量生産が実現した、ということです。この動きをおし進めることができた技術的背景として、ロクロ技術の改良のことが述べられ、輪積み後に形を整える程度の補助的利用から始まり、ついには高速回転による水挽き成形へと到達して

大量生産を実現したことが、説かれました。また、変化は焼成技術の面にもみられ、すでに窯を用いて行っていたウバイト併行期の土器焼成はウルク前期併行期に入ると、窯体内の温度を安定させ、しかも還元炎による焼成を行うほどに高温管理技術が進展をとげたといいます。そしてこの高温管理技術を実現するにあたっては、金属製練技術から多くを学んだことが指摘されました。

変化はまた、土器のこのような製作技術の面だけにとどまらず、工房の立地にも及んでいたようです。工房が居住地に混在していた状態から抜け出して、集落内の独立区画を占めるようになり、やがてウルク前半併行期には、居住域から完全に分離して集落内で独立の区画を形成するに至ったことが、説かれました。要するに、世帯別に行われる段階にあたったウバイト併行期の土器生産が、効率化、専業化の動きを加速させ、ついには初期王朝期に、土器の生産や管理を行政的に支配し、分業生産を確立させることまで体制を整えたというのが、小泉さんのご発表の骨子として、私が理解したところです。

中国の土器生産 小泉さんが北メソポタミアで描いてみせてくださった、土器生産のこのような変容ぶりに関連して、中国の土器生産を少し覗いてみると、銅石時代にあたる龍山文化期の遅くとも後期には、底面を糸で切り離した土器がみとめられるので(図1)、ロクロで水挽き整形する量産型の土器生産を行っていたらしいことが、わかっています(The Second Henan 1982)。また、龍山文化といえば、軟質ですが還元炎焼成を行った黒陶が思ひますが、黒陶に仕上げるために、さらには灰陶と呼ばれる堅緻な土器を焼きあげるためにも、窯を使っていたことは、河南省陝県廟底溝出土の窯址例(図2)が示している通りです(The Institute of Archaeology 1959)。

この龍山文化期に属することが判明している河南省淮陽県平粮台で、一辺185mの正方形に周壁をめぐらせた遺構

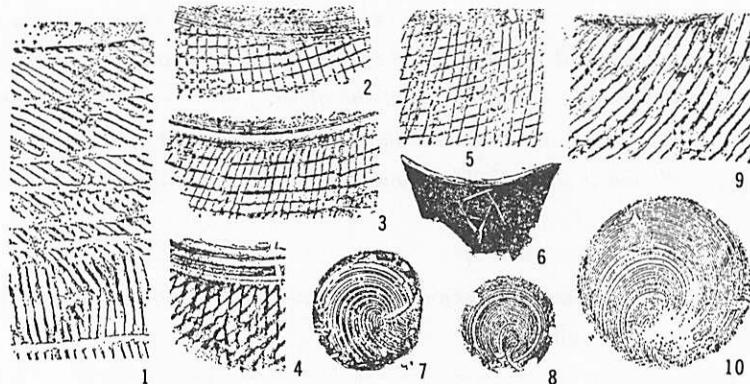


図1 河南省煤山遺跡出土土器

1—5、9 灰陶；7、8、9 糸切底

(The Second Henan Archaeological Team 1982: 図1)

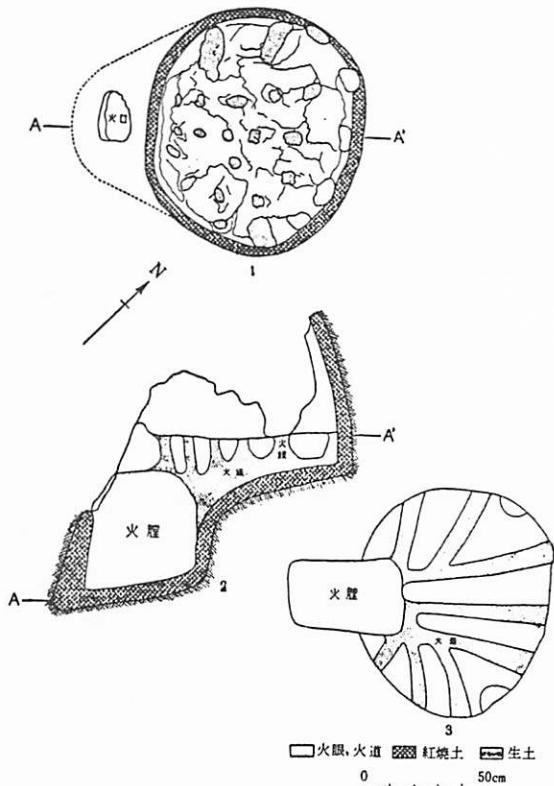


図2 河南省廟底溝遺跡出土龍山文化期の土器焼成窯
(The Institute of Archaeology 1959)

が出土しており、衛守詰所を両側に伴い中央に排水管を埋めた門址が、南壁のちょうど中心で確認されました (The Henan Archaeological Research Institute 1983)。そして、周壁内からは、建物用基壇や平地住居や墓に加え、土器焼成の窯が3基見いだされています。もっぱら、宮殿や、祖先を祀る宗廟を擁したと思われる、このような特別区画の内部に、土器焼成窯が営まれていたことは、土器生産の専業度が、たとえ一部にせよ、高かったことをうかがわせます。また同時に、エジプトの初期王朝期の王都と目され、方形プランの周壁内の多くを宮殿や神殿が充たしているヒエラコンポリスで、アラバスター製容器の製作工房が営まれていたことが、この平糧台の例にちなんで思いだされます (Fairervis 1971-1972)。優品はこうして製作されていたのでしょうか。

優品というと、龍山文化期の黒陶のなかに、器壁がきわめて薄い脚台付土器の一群があります(図3)。器壁の薄さを卵殻にたとえて卵殻土器と通称されているほど優れた作りのこの種の黒陶は、日常生活に使うものではなく、一種の礼器として特定の工房で製作され、賜与されて、とりわけ有力な人物のもとにあったのち墓に副えられた、ということのようです (Du 1982)。これもまた、土器生産が一部にせよ専業化していたことを物語っていますが、専業化と

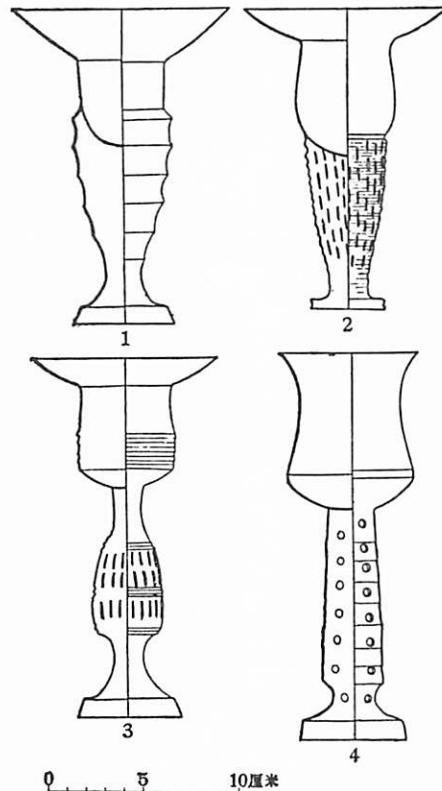


図3 山東省東海峪遺跡出土卵殻陶
(The Tung-hai-yü Archaeological Team 1976 : 図2)

ならんで注意したいのは、土器にこうして階層差がみとめられる点です。

龍山文化期の墓に規模や副葬品量の差が存在するところから、階層社会であったことがよく説かれます。そしてその階層差は、墓の規模となるんで、玉器の有無や量の多寡にもっとも端的に表現されています。銅石時代にあたる龍山文化期の段階においては、有力者の保有した威信というものが、このようなかたちで顯示されていたわけです。したがって、玉器に較べると、土器の階層差は、なおほなはだしいとまではいえないようです。ところが、夏とも殷前期ともいわれている、青銅器時代の二里頭期に入りますと、その文化が長江方面に及ぶほどのめざましい拡張を遂げることに加え、土器様式の点では盃や爵などの、やがて青銅器に写される器形の土器が登場します(飯島 1991)。そして次代の二里岡期には、釉薬をかけた土器が出現し、殷墟をのこした次の安陽期に入ると、真っ白に焼きあがる上質の陶土を使い外面に図文を刻んだ土器の流行が加わります(林 1995)。土器の階層化は龍山文化期を過ぎてのちに著しくなったことが、こうして知られるわけです。

なお、土器工房の占地について若干の知見を添えておきますと、二里頭期の王都址と覚しい河南省偃師県尸郷遺跡では、前述の平糧台と同様に、窯址が周壁内の一隅を占め

ています (The Second Henan Archaeological Team 1999)。これに対して、二里岡期の王都である河南省鄭州市にのこる城郭の発掘結果によると(図4)、土器工房は青銅器や骨器の工房と同じく、周壁の外に位置しています(The Henan Provincial Museum 1977)。したがって、工人の地位が低下した画期をもし求めるすれば、二里岡期の頃がふさわしいように思います。

陶は政を映すといいます。小泉さんの発表で土器の階層化のことが触れられていなかったので、気になってその後にうかがったのですが、ご教示によりますと、初期王朝期に青銅製の容器が増え、階層化は土器の改良によってではなく、青銅器の参入によって達成されたとのことでした。アナトリア考古学の氣鋭である紺谷さんからも、同じ内容のことを教えていただいた記憶があります。土器製作の技術を高度化することによって階層差を顕現させた中国のような変化が、西アジア方面ではみとめられないのではないか、と勝手に想像しているところです。この点に関心のある専門の方に検討をお願いして、再びご教導にあずかることができればさいわいです。

それはともかく、銅石時代に土器の量産化が達成され、ついで、青銅器時代の開始とともに土器・容器の階層化が顕著になるという順序を踏んだ点、つまり、量産化と階層化の達成が一致せず、量産化の方が先行する点で、北メソ

ポタミアと中国は軌を同じくしているようです。量産化の推進によって、土器の社会的地位が低下し、込められていた精神世界が風化すると、差別化して新たな価値を土器に付与するようになるというのは、変化の方向としてはごく自然なことかもしれません。

日本の土器生産 そこでつぎに、文明の縁辺という意味で日本をとりあげ、そこで展開された土器生産の変容ぶりを、北メソポタミアや中国の場合と較べてみるとします。日本の場合、鉄器時代に移行する弥生時代後期の開始とともに、畿内を中心にタタキ技法が流行し、土器製作が粗雑化します。つまり、土器1個あたりの製作に投下する労働量が、中期よりも格段に少なくなるのです。しかし、回転台さえ使わず、窯に頼らない野焼きの状態では、1個あたりの労働量を軽減して生産の効率化をはかったとしても、おのずから限界があったはずです。

それならば、製作に携わる人間の数を増やし、専業度を高めることが、生産量を大きくする方策として、ひとまず考えられます。このうち専業度の高進については、古墳時代開始ごろの河内産庄内式甕(図5)が交易品であった可能性がなくはないので、たとえ一部にせよ、専業化の動きがあったことは否めません。しかしそれを認めたとしても、北メソポタミアや中国すでにみたような、国家形成と連動する専業化の鮮やかな動きとは、較べるべくもありませ

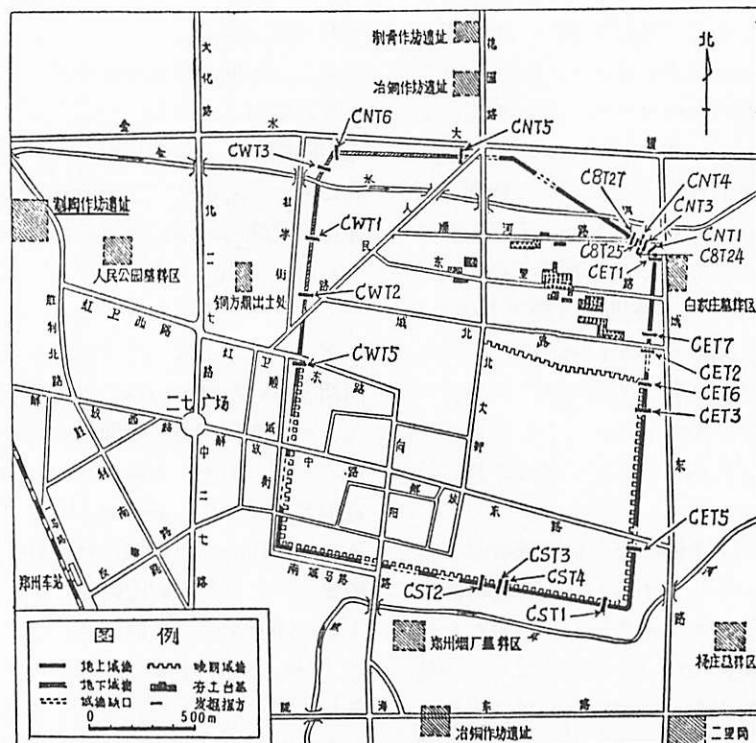


図4 殷の王都鄭州城址
(The Henan Provincial Museum 1977 : 図1)

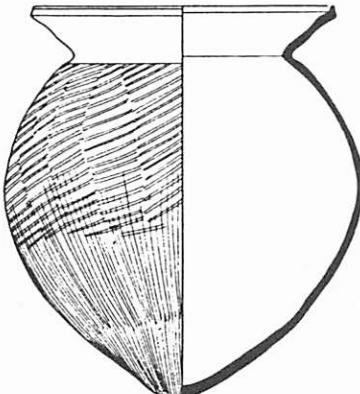


図5 大阪府船橋遺跡出土庄内式甕 縮尺1/4
(杉原莊介・大塚初重編1971『土師式土器集成』本編
I Pl. 28-17)

ん。古墳時代の開始は、広域な政治秩序の形成という意味で、日本における国家の出現でもあるのですが、出現へ向かう動きを土器生産の変容のなかに見いだすのは、難しいようです。北メソポタミアや中国とは、この点で違っています。

生産の効率化が進み、専業度が高まるのは、古墳時代に入ってからのことと、朝鮮半島南部から伝えられた須恵器生産の定着をまたなければならなかったようです。したがってその高進は、古墳時代を前後に二分した場合の、後半期にあたることになります。もっとも、墳丘の外表を飾った土製品つまり埴輪の生産については、畿内から移動した工人による手慣れた製品が、移動地の在来の工人による拙劣な出来の製品とならんで墳丘を飾った例が、前半期に畿外で見いだされますので、畿内の埴輪工人が比較的早く専業化していたことは、推測してもさしつかえないと思います。

埴輪生産のことはさておき、日本の土器生産に画期をもたらせた須恵器生産を問題にしますと、その開始にともない、高速の回転台を駆使する技術とならんで、窯を使って高温で焼きしめる還元炎焼成法が、もたらされました。窯煙をあげはじめた頃の製品は、一部の有力者の用に供され、かつ、流通品として畿外各地へと運ばれていました。やがて須恵器は広く普及し、生活にも、葬送にも、祭祀にも用いられるようになったから、その高まる需要にこたえるために、畿内各地でも生産が開始され、量産化がはかられたようです。雄略期に費土師部を設けた記事があるので、須恵器が普及しはじめた五世紀後半の雄略（ワカタケル）の頃に、在来の土器である土師器の生産もまた、一部にせよ専業化の度合を加えたことが想像されます。しかし須恵器の操業は、土師器とは比較にならないほど大規模であったのです。そして、徐々にですが、生産の効率をあげる

ために粗雑化が進行していきます。

さて、当時の有力者というと、日本考古学で古墳と呼んでいる大型の墳墓に葬られた少数者がそれにあたります。わけても、大阪平野に盛んに築かれて今に残る、全長200mを超えるような、前方後円墳の巨姿をさしあおぐとき、さらには、全長475m をはかる仁徳陵の築造に延べ680万人を要したという推算結果を眼にするとき、その被葬者の勢威が並々でなかった感を深くするのは私だけにとどまらないと思います。ところが、使われていたであろう土器を想像してみると、墳墓の壮大さから受けるほどの階層差はなかったように思われます。小型の竪穴住居で雨露をしのいでいた庶民はともかく、古墳に葬られるほどの人物なら、大前方後円墳の被葬者も、村長や族長程度の小型円墳の被葬者も、什器や副葬品として、土師器と須恵器を使っていたのです。したがって、磁器が有力者の身のまわりを飾っていた、同じ時期の中国の南北朝時代の様子と較べると、土器の階層差ははなはだしくなかったと極言しても、それほど大きな誤りはないはずです。

日本で土器の階層差が目立つようになるのは、宮都が成立し造寺が盛んになる、飛鳥・奈良時代のことです。土器に宮都様式が出現するとともに、輸入品の施釉陶器やガラス器や金属器が加わり、こうしていっくに階層化が進んだのです。飛鳥時代の墳墓から出土した三彩や、正倉院に残る各種の輸入品の華麗さに、ほとんど階層化しなかった古墳時代の土器との鮮やかな相違を、われわれは見てとることができます。また、大量生産をめざすロクロ水挽き技法も、結局、古墳時代のなかでは達成されず、飛鳥・奈良時代をまたなければなりませんでした。古墳時代の土器生産は、この点でも限界をかかえていたのです。

それでもなお、古墳時代の須恵器生産にみとめられた、高速回転台を駆使した生産の効率化を重視しますと、効率化が達成されたのちに階層化が進んだ北メソポタミアや中国で瞥見したのと同じ変容の構図を、日本でも描くことができますし、またいっぽう、水挽き技法による効率化の方にどうしても力点をおきたいということなら、日本では効率化と階層化が同時に進行したことになります。はたしてどちらがふさわしいのか、これは日本の考古学者に問いかけられた問題です。

地域社会の圏域

南アナトリアや北メソポタミア方面の、アッカド帝国ならびにその併行期の前期青銅器時代をとりあげた紺谷さんの発表は、ご自身が述べておられたように、土器様式の圏域を主に経済活動に基づいて解釈し、当時の有力な都市国家の領域の広さを問うたものです。紺谷さんがあげられた特徴ある土器様式のそれぞれの圏域について、ほとんど臨

場感のない私には、その当否を評価する能力も蓄積もありません。ただ、各圏域の中心に規模の大きい都市が位置し、都市間の隔たりは平均すると200kmをはかるという、提示された明解なモデルが、大いに私を刺激し、蒙を啓いてくれました。そこで、不案内な土器様式のことは敬遠させていただき、ここでは圏域というテーマをとりあげ、蛮勇を奮ってにわか勉強の結果を申し述べ、ご高評にあずかりたいと考えた次第です。

40km圏 エジプト考古学者の父とされる W·M·F ピートリ (Petrie) が、1923年に公刊した書物のなかで、エジプトの圏域のことをとりあげて、次のように述べています (Petrie 1923: 3-7)。

エジプト三角洲地帯の初期の州の首邑間の距離は平均して21マイル（約34キロメートル）で、初期のメソポタミアの諸都市間の距離が平均21マイルであるとの酷似している点が注意される。なんらかの物理的要因が、こうした原始支配の境域を制限しているらしい。それは早期の首邑の基本的機能である、穀物の集中貯蔵庫でありうる距離的限界を、しめすものではないか。穀物を集中し得るのは（半径）10マイルまでで、それ以遠は運搬コストが高くつくので、より近い中心をつくって集める方が安上がりなのである。もしそうだとすれば、エジプトの州の単位またはユーフラテス河流国家の州の単位は、穀物の集中貯蔵である。そして独立の都市国家を形成する力をあたえるものは、余剰農産物の集中貯蔵である。交換手段が国家の大きさを規制するのである（横田 1963: 331-362）

玩味して読むと、資料の乏しかった80年近く前に書かれたとはとうてい思われない鋭い指摘に充ちており、ピートリの慧眼には恐れいります。ピートリというと、日本に考古学を創設した浜田耕作の恩師であり、ピートリが Tools and Weapons (1917) で示した集成の重要性やその精緻な図の配列方法が、また型式学的研究法が、浜田によって日本考古学に移植され、優れた継承者を得て今に伝わっているので、日本考古学の恩人でもあるわけです。ただし、エジプトの圏域に関する鋭い指摘が物語っている歴史意識の高さの方は、積極的に移植されたのかどうかわからていません。かりに移植されたとしても、当時の日本考古学の水準を考えますと、根付くのはかなり難しかったでしょう。

日本考古学のことはさておいて、ピートリの圏域説は、半世紀後に体裁をあらため、母国イギリスで後継者を得ることになりました。もっとも、その後継者はピートリの圏域説のことをまったく知らなかったようです。それが C. レンフリュー (Renfrew) の Early State Module (ESM) 論であるといえば、専門家の方ならずともご存じの方は多いと思います (Renfrew 1975: 3-59)。すなわち、気象学者

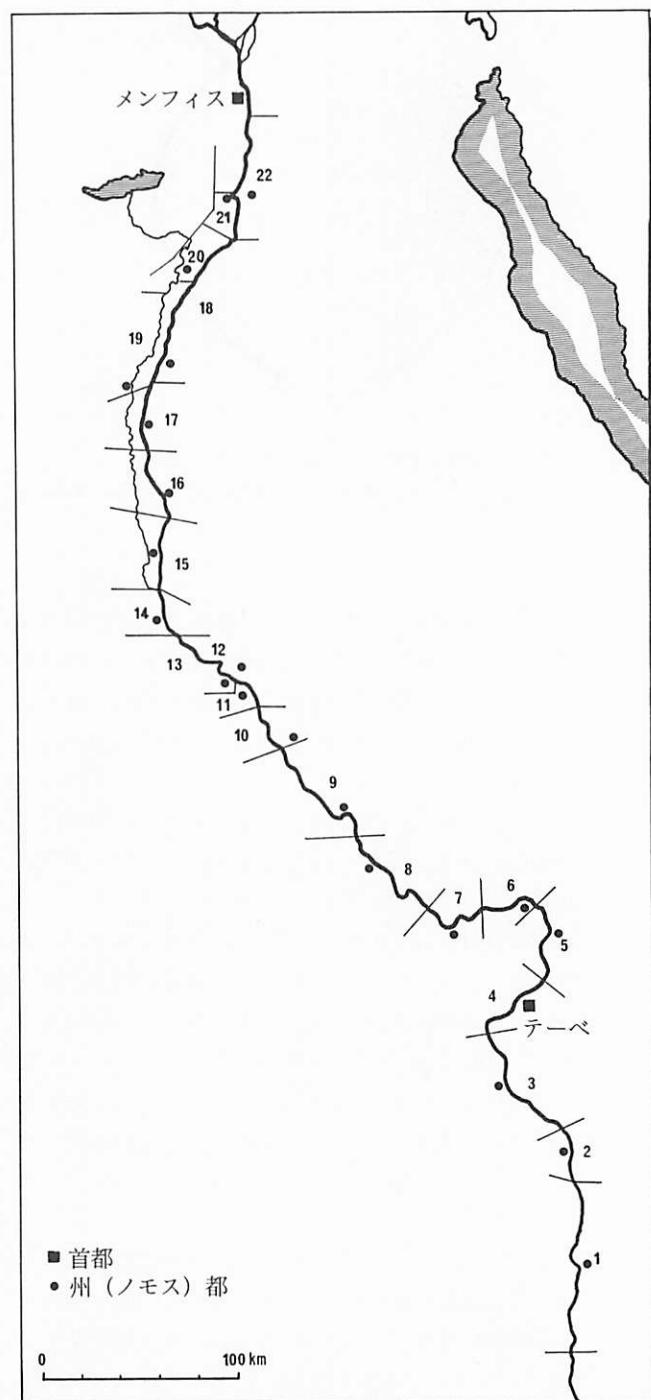


図6 上エジプトの州（ノモス）区分
(Baines, J and J. Málek 1980 *Atlas of Ancient Egypt* P. 16の図を改作)

のティーセンが不規則に分布する観測点から集水域を定めるために考案した方法を集落の圏域分析に応用して、隣接する初期国家の領域を求めるとき、中心集落間の平均的距離が、40kmになるのだそうで、いきおい、「初期国家」の領域は平均40kmということになります。

レンフリューはミノスやエトルリアやマヤの例を図示し

て、この40km圏の立証につとめ、さらに、メソポタミアにもこれが適用できることを述べているのですが、エジプトへの適用については否定的な弁を残しています。ナイル河谷が単線的で、面的な広がりをもっていないこと、また、首邑例として示すことができるような古王国時代以前の集落址の発見が乏しいことが、その理由のようです。しかし、エジプトのノモス（州）というのは、上エジプトの場合、22をかぞえるそれぞれが独自のエンブレムを持ち、王朝が分裂するところつまりが素顔をのぞかせます。これらの点から察せられるようにノモスは、統一以前に淵源が遡る一種の祭祀圏であったことが考えられます。また、22のノモスの規模に大小はありますが、平均すると30～40kmほどになることは、第6図として示した区分図からわかつていただけるはずです。

さらに中国についても、レンフリュー学説の影響でしょうが、文明成立期の圏域論が、近年とみに交わされるようになっています。中国人研究者では張学海氏らが、日本人

研究者では宮本一夫さんらがこの問題にとりくんでおり、中村慎一さんは世界的視野にまで立って位置づけを試みています（中村 1997：155-169）。張氏によると、山東省の泰山北麓の龍山文化期の集落は、半径20km後の小地区ごとで、大規模な囲郭集落を頂点にして中小の集落が、階層的に組織されていたといいます（張 1996：40-52）。また宮本さんによると、山東龍山文化期の囲郭集落は、おおよそ50km間隔で分布することです（宮本 1993：1-24）。

日本に眼を転じると、私の勤務地の茨城県下の弥生時代後期後半に、東部の那賀川・久慈川流域を中心として十王台式土器の集落が、西部の霞ヶ浦西岸を中心に上稻吉式土器の集落が、それぞれ分布しており、その中心域の広さはともに30～40kmをはかります（図7）。このように、弥生時代後期後半に個性ある土器様式が抽出され、その様式圏の中心に属する集落の分布域が、30～40kmの広さを有することは、茨城県下にとどまらず、少なくとも関東一円には敷衍してもさしつかえないでしょう。そういえば、「青垣

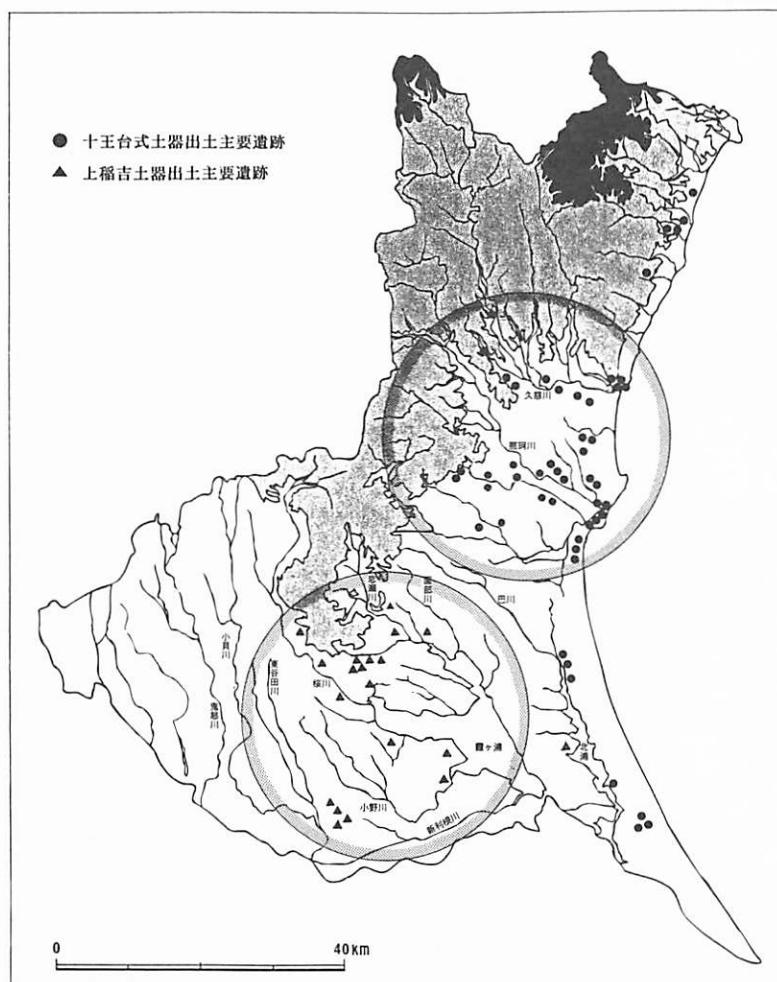


図7 茨城県下における弥生時代後半の主要遺跡分布
(霞ヶ浦町 1998:図1・2)

山籠もれる」と倭建命がうたって称えた奈良盆地もまた、南北30km、東北13km ほどの広さを擁しています。適度な閉鎖性とならんと、その規模もまた、日本の国家形成に能動的役割を果たした勢力が、この地で育まれた要因のひとつに、数えられると思います（川西 1999：53-54）。

さて、ピートリやレンフリューが示した例のうえに、こうして中国や日本の例を加えますと、文明や国家の形成期に40km 圏の個性がきわだつようになる現象は、麦作か稻作か、灌漑か天水かという農耕生産の形態にかかわりなく、また地形のノイズや生態系の違いや文明度の高低をも越えて、広く普遍的に存在していることがわかります。また、エジプトやメソポタミアや中国などでは40km 圏内に首邑はひとつだそうですし、日本のなかでも同様な例があるかとは思います。これを単核社会としますと、関東地方の40km 圏は多核ないし等質の社会であったようです。したがって40km 圏は、社会のこのような差をも映していないことになります。このことは40km という広さが、レンフリューも触れているように1～2日の旅程にあたり、ヒューマン・サイズの交流圏であること、したがって、文明や国家が形成される緊張や社会不安のもとではいきおい交流が頻繁になり結集度が高まったであろうことを、おそらく物語っているのでしょうか。

この点に関連して、すでに発表した拙見をここで再言させていただくと、都市は発生時においてすでに、定型と非定型とに分極しており、エジプトや中国ではあらかじめ計画されたことをうかがわせる幾何学的姿で、西アジアでは計画を欠いた有機的姿で、それぞれ出発したいという違いがあります（川西 1996；1999）。そして、定型か非定型化かというこの姿貌の違いは、都市の発生の契機の相違にそれを生んだ原因があり、かなり乱暴に極言しますと、エジプトや中国では祭儀上のセンターとして、西アジアでは交易上のセンターとして出現したというのが、いま私が考えている仮説です。すなわち、エジプト初期王朝の王都であるヒエラコンポリスや、中国二里頭期の王都である偃師戸郷では、宮殿・神殿・宗廟のような官公的施設が、周壁内の多くの面積を占有しており、したがってこの点に一線を設けて、農民や商工業者が居住していたシュメール都市に代表される西アジアの諸都市を、エジプトや中国などから分離することができます。この相違は、都市間の規模の格差の様子や、文字の発生の仕方にも表れているので、詳しくは、拙著を併読いただければさいわいです。

なお、外国人研究者の所説を引用することが求められている専門家の方があたるために、私の手元にある乏しい洋書のなかで、都市の分極問題に関連するものをあげるとすると、B. G. トリッガー（Trigger）が参考になろうかと思います（Trigger 1996）。彼は初期文明を「領土国家」と「都

市国家システム」と分けたうえで、前者の「領土国家」の例としてエジプト・中国・インカを、後者の「都市国家システム」の例としてメソポタミア・マヤ・アステカ・ヨルバをあげ、両者それぞれの特質と共通点について論じています。トリッガーの論説に勇気づけられたので、翻訳作業を試み、素訳までは済ませたのですが、時間や能力の不足でいま頓挫しています。

それはともかく、個性をきわだたせた40km 圏が、農耕村落社会と都市社会、あるいは、首長制段階と国家段階とをつなぐ環として、時空間の違いを越えて普遍的に存在するということであれば、出現した都市が分極した姿をわれわれにみせるのは、40km 圏社会の内実が一様ではなかったからでしょう。西アジアのこの分野の専門の方には、都市が非定型の姿で出現した原因について関心を寄せていただくことを期待しています。あとでまた、この問題をとりあげることにします。

200km 圏 紺谷さんによれば、200km という主要都市間の隔たりは、水上交通のうえでも理想的であった可能性が強いだけにとどまらず、半径100km という圏域は、南東アナトリアや北シリアの天水農耕地帯において、都市国家の生産基盤にふさわしい広さでもあった、ということです。アッカド帝国及びアッカド併行期の農耕生産力を農地面積や収穫量から推算して人口と対比し、こうして土器様式圏のもの意味を追求したところに、紺谷さんの今回の発表の真価があろうかと私なりに考えています。

200km という思いだすのは、黒曜石の交換・交易をとりあげたレンフリュー論文で、彼が想定するとの交換・交易形態においても、産地から200km 余りのところで、黒曜石の比率が大きく減少に転じていることです（Renfrew 1975：3-59）。半径200km 余をはかる密なこの供給域についてレンフリューは、高い頻度で交換・交易が行なわれたと述べるにとどまり、残念ながらほとんど説明を加えていません。しかし、今回の紺谷さんの発表の趣旨を汲むと、この200km という距離、あるいは半径100km の200km 圏に、少しこだわってみたくなります。

第8図としてあげたのは、長江下流南岸から杭州平野にかけて、前三千年紀を中心に興隆をみた良渚文化の遺跡の分布図です。さきほど触れた黄河流域の龍山文化よりも初現が500年ほど古く遡るこの新石器時代後期の文化は、北方の龍山文化に増して、玉器がその富を代表しており、方柱の芯に円孔を穿った縊などの多彩な形態の玉器が、分布図中の多くの墳墓遺跡から、副葬品として出土しています。また、分布域の南端にある莫角山遺跡で、東西670m、南北450m という、とてつもない規模をそなえた人口基壇の存在が近年になって確かめられ、米作圏に属するこの文化の豊かさがあらためて論議を呼んでいます。

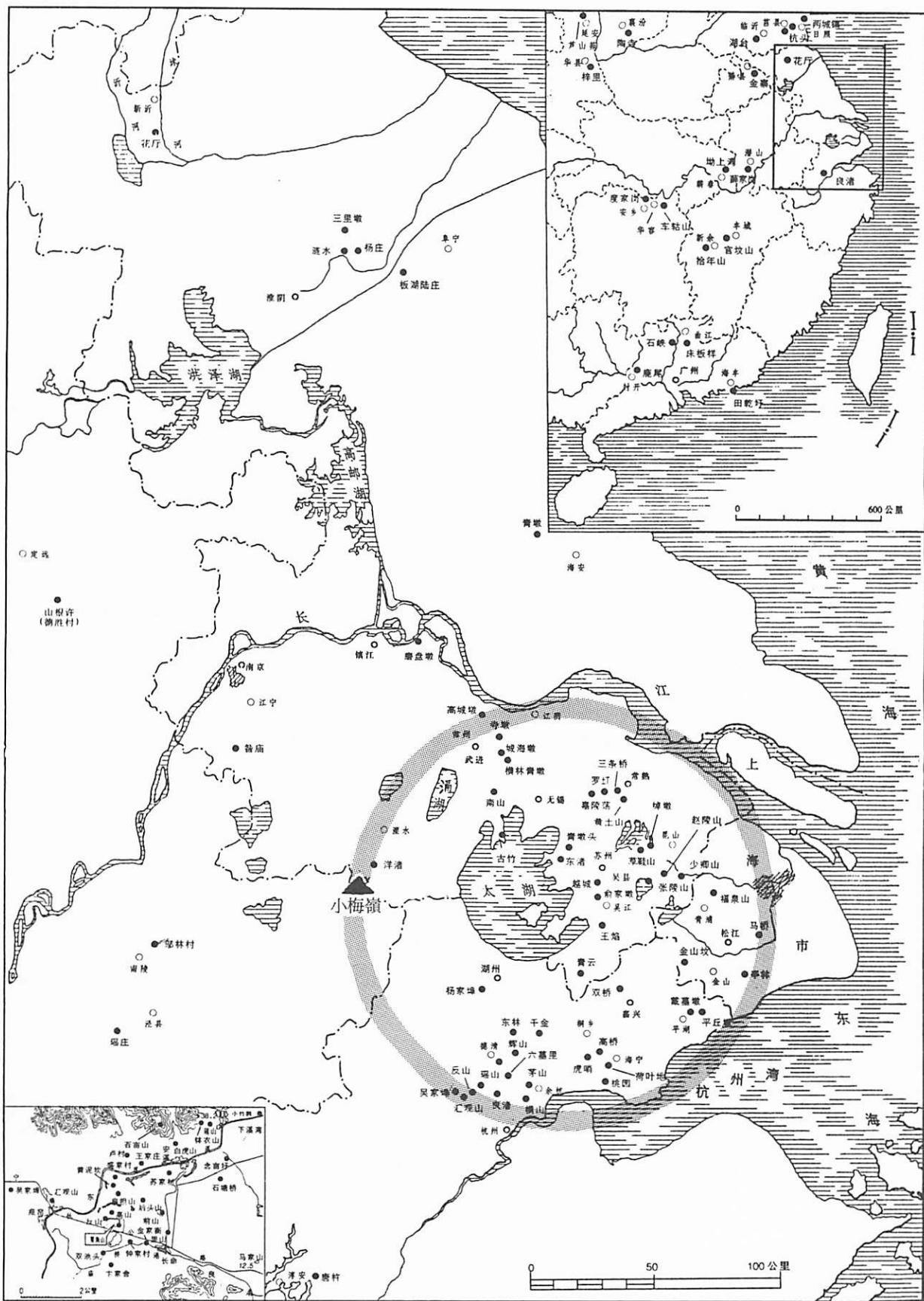


図8 良渚文化玉器出土遺跡の分布
(Xu Huping 1996:附編)

とりわけ中国考古学者のあいだでいま関心を集めているこの良渚文化の遺跡の分布をみると、太湖の周辺から杭州湾岸にかけて、ほぼ200kmの範囲に集中していることがわかります。しかも、出土した玉器の原材の産出地であることが近年になって確認された、太湖西方の小梅嶺を起点にしますと、ここから原材が供給された玉器の分布もまた、200km圏の範囲にほぼおさまっていることになります。

もっとも、龍山文化の玉器の原材産出地がわかつていないので、これもまた小梅嶺だということになれば、供給域は黄河流域にまで拡がります。良渚文化の富の源泉のひとつに玉原材の供給があったことを力説しなければならない日が、将来訪れるかもしれません、その日までは、良渚文化圏内における小梅嶺からの原材の供給域が200kmである、というように理解しておくことにしましょう。

ところで、紺谷さんが描いた200km圏の構図は、アッカド帝国およびアッカド併行期ということですから、もうすでに都市国家段階の初期王朝期を過ぎた、領域国家ないし広域国家の段階に属します。これに対して良渚文化期は、殷という広域国家が歴史にその巨姿を現わすまでに、なお500年ほどの時間の経過を要する、新石器時代の段階にあたっています。したがって、地域を隔てて、しかも社会の段階まで異なる両者を、同列に並べて議論することについて、不満を覚える専門家の方が多いのではないかと思います。そこで、レンフリューの200km圏は新石器時代のことであり、殷の王都の移動範囲もまた200km圏であることを指摘して文化段階の調整をはかるとともに、もう少し例をあげてみることにします。

南メソポタミアのウルク期に200km圏が抽出できることを松本健さんから教えていただきましたし、中間期にエジプトでも見いだすことができそうですが、検討は専門家の方にお願いして、私にとって身近な日本考古学の成果に目を向けて、親縁様式を一括にした、土器の大様式の圏域というものが、この場合注意を引きます。すなわち、厳密をもって旨とする日本考古学の研究者の方がたに叱られそうですが、大雑把にいいますと、北九州、瀬戸内の東西、近畿、東海地方の東西に、それぞれ、弥生時代後期の土器の大様式圏を設定することができます。この圏域がそれぞれ、150～250kmの広がりを持っているのです。なお、信州と関東はともに200kmの広がりを有し、この点では申し分ないのですが、残念ながら、両地域の弥生時代後期の土器様式をそれぞれに一括にする勇気はありません。様式圏の統合が遅れるようです。

もとより、中国からみると、日本の地は文明の縁辺に位置しています。それでもこうして200km圏の存在に出会うことは、この広さが、情報が正確に伝わりモノが頻繁に動くヒューマン・サイズの圏域であり、しかもその限界域

であったせいでしょう。したがって、西アジアで抽出された200km圏の実相を説明するさいには、同地の固有の事情を加味したうえでなお、このように普遍的に存在することの理由にも留意する必要があるのではないでしょうか。一考を煩わせたいと思います。

都市が呱々の声をあげたとき、すでに定型と非定型とに分極していたという点を、再び問題にしますと、良渚文化圏内に玉器が分布していることを先に述べましたが、殷代に入ると、王都の移動域をはるかに越えて、青銅器が分布を拡大していくことが、この問題に関連して注意を引きます。また日本の場合も、三遠式にせよ近畿式にせよ弥生時代後期の銅鐸は陸上での分布域がいずれも200kmどまりであるのに対し、古墳時代前期の副葬品を代表する三角縁神獣鏡や碧玉腕飾類の分布は200kmを大きく越えています。つまり、ともに、ヒューマン・サイズの伝統的圏域の境界を越え、広域の政治秩序の形成を果たす点で、アナロジーがみいだされる可能性があるわけです。

このようにいえば、三角縁神獣鏡はことごとく畿内から畿外へ製品が移動しているけれども、弥生時代後期の銅鐸は出土地の近くで作られ、あまり移動しなかったのではないか。殷の青銅器は王都の直属工房で作られ、運ばれたことがわかっているのに対し、良渚文化の玉器が特定の工房で集中生産されて運ばれたかどうか、不明ではないか。こうした厳しいお叱りの声があるやもしれません。たしかにその通りなのですが、ただ、さしあたり吟味していただきたいのは、分布域の拡大というアナロジーが成立するかどうかということよりも、200km圏をはるかに越えて運ばれたであろう多くのモノの代表格が青銅器であるという点なのです。

すなわち、玉器もそうですがわけても青銅器は、用途を重視すると祭器、価値に力点をおくと宝器、所有者との関係でいうと威信財と呼んでさしつかえない器物です。日常生活に用いる什器や消耗品ではないこの種の器物が、王都から選ばれて広い分布域を獲得したことは、中国が祭儀センターとして定型都市を育んだことと、無関係であるはずがありません。これに対して西アジア方面では、都市文明の中心地であった南メソポタミアから移出される品物の代表格として、毛織物があげられています(Van Du Mieroop 1997)。穀物や宝飾品も加えてよいようですが、いずれにせよ、殷の青銅器に匹敵するような祭器は見あたらないと思います。

エジプトについても同じような検討をしていただけるとありがたいのですが、それはまた後日に教えを乞うことにして、さしあたっては、定型都市を育んだ中国と、非定型都市を育んだ西アジアとは、200km圏を越えて中心から運ばれた品物の性質に違いがあるらしい点、したがってまた、

品物の移動に込められた意味にも差異があることになる点を、少しばかり強調しておこうと思います。

最後になりましたが、貴重な助言と刺激で駄馬を導き、このような楽しい勉強の機会を与えてくださった西秋さんはじめ学会の皆さんに、ワープロ入力をお願いしている筑波大学大学院生花坂哲さんに、また、本紙の編集の任にあたられる方がたに、それぞれお礼を申しのべ、こころを残しながらそっと万年筆をおくことにします。

引用・参考文献

- Du Zaizhong (杜在忠) 1982 「試論龍山文化的“蛋殼陶”」『考古』1982-2: 76-81.
- Fairservis, W. A. 1971-1972 Preliminary report on the first two reasons at Hierakonpolis. *Journal of the American Research Center in Egypt* 9: 7-68.
- Petrie, W. M. F. 1923 *Social Life in Ancient Egypt*. London, Constable & Ltd.
- Renfrew, C. 1975 Trade as action at a distance: question of integration and communication. in Sabloff, J. A. and C. C. Lamberg-Karlovsky (eds) *Ancient Civilization and Trade*. Albuquerque, University of New Mexico Press, 3-59.
- The Henan Archaeological Research Institute and the Relics Section of the Bureau of Culture, Zhoukou Prefecture (河南省文物研究所周口地区文化局文物科) 1983 「河南淮陽平粮台龍山文化城址試掘簡報」『文物』1983-3: 21-36.
- The Henan Provincial Museum (河南省博物館) 1977 「鄭州商代城址試掘簡報」『文物』1977-1: 21-31.
- The Institute of Archaeology, CASS (中国科学院考古研究所) 1959 「廟底溝与三里橋」(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁 9).
- The Second Henan Archaeological Team, IA, CASS (中国科学院考古研究所河南 2 隊) 1982 「河南臨汝煤山遺址発掘報告」『考古』1982-4: 427-475.
- The Second Henan Archaeological Team, IA, CASS (中国科学院考古研究所河南 2 工作隊) 1999 「河南偃師商城小城発掘簡報」『考古』1999-2: 1-11.
- The Tung-hai-yu Archaeological Team of the Shantung Provincial Museum and the Cultural Centre of Jih-chao Country (山東省博物館・日照県文化館) 1976 「1975年東海峪遺址の発掘」『考古』1976-6: 378-382.
- Trigger, B. G. 1996 *Early Civilization: ancient Egypt in context*. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Van De Mieroop, M. 1997 *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford, Clarendon Press.
- Xu Huping (徐湖平) 編 1996 「東方文明之光—良渚文化発現60周年紀念論文集一」海口、海南国際新聞出版中心.
- Zhang Xuchai (張学海) 1996 「試論山東地区的龍山文化域」『文物』1996-12: 40-52.
- 飯島武次 1991 「中国新石器文化研究」313-314頁。
- 霞ヶ浦町郷土資料館編 1998 「霞ヶ浦沿岸の弥生文化」展図録。
- 川西宏幸 1996 「エジプトにおける都市文明の誕生」金閔恕・川西宏幸編『都市と文明』講座文明と環境 4 朝倉書店 42-62頁。
- 川西宏幸 1999 「古墳時代の比較考古学」同成社。
- 中村慎一 1997 「石家河遺跡と中国都市文明の起源」藤本強編『住の考古学』同成社 155-169頁。
- 林巳奈夫 1995 「中国文明の誕生」吉川弘文館 231-235、303頁。
- 宮本一夫 1993 「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」『日本中国考古学会報』3 1-24頁。
- 横田健一 1963 「大和国家権力の交通的基礎—畿内を中心とする二三の考察—」櫻原考古学研究所編『近畿古文化論叢』吉川弘文館 331-362頁。

川西宏幸

筑波大学歴史・人類学系

Hiroyuki KAWANISI

Institute of History and Anthropology,

University of Tsukuba